

# 一 これからの福祉

2021  
202X  
20XX



現在、健常者と障害者はそれぞれ住み分けがなされ、お互いに関わる機会はほとんどなく、隔たりが生じている。そのため私たちは無意識のうちに高齢者は高齢者、障害者は障害者のフィルターを通して認識している。お互いを知り、関わることでできる空間が必要とされているのではないだろうか。本提案において、福祉を必要とする人々を要福祉者と呼び、健常者との境界をなくす。そうすることで障害が個性となっていく。一人一人に配慮できる街へと変わっていく。

## 二 募空間のすゝめ

### 一 優先空間

電車の優先席は日常に存在する要福祉者のための場所でありつつ、健常者も存在し、グラデーシヨンのかかった双方にとって心地良い場所といえる。そのような場所が街にも必要とされているのではないだろうか。



要福祉者と健常者の関係に限らず、人は皆違う。それぞれの身体的、精神的特徴が違うのだから、みんなが同じような環境下で生活することは誰かにとっては不慣れた環境となってしまう。だからこそ、全員に対して平等に同じ環境を整えてあげるのではなく、それぞれの場所を提供する必要がある。そのような空間を優先空間と呼ぶ。

### 二 募金 ⇩ 募空間

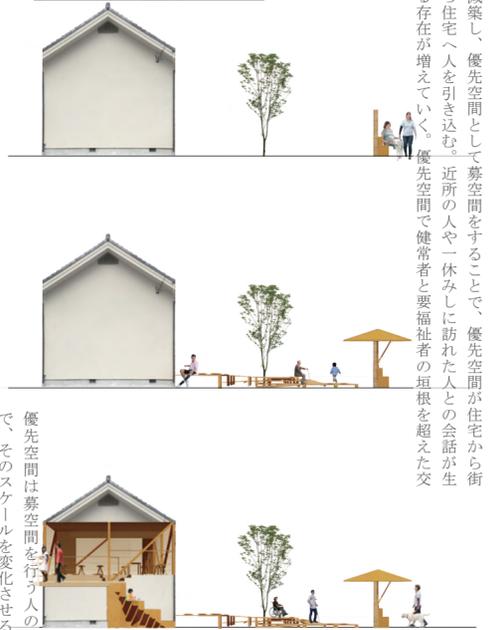
優先空間の実現のために、募空間という行為を提案する。私たちは助けが必要な人たちに募金という形で手を差し伸べることが多い。ここではお金ではなく、空間を募ることで、要福祉者や健常者の居場所となる空間を生み出す。健常者も要福祉者も対等な立場で募空間という行為を行うことができる。



# 募空間のすゝめ

### 三 侵食

優先空間は住宅の塀を解体し、様々な人の居場所を形成しながら住宅内部へと侵食していく。さらに、住宅の一部を減築し、優先空間として募空間をすることで、優先空間が住宅から街へ人を駆り出し、街から住宅へ人を引き込む。近所の人や一休みしに訪れた人との会話が生まれ、要福祉者を見守る存在が増えていく。優先空間で健常者と要福祉者の垣根を超えた交流を生み出していく。



優先空間は募空間を行う人の気持ち次第で、そのスケールを変化させる。たとえば小さな交流を求める人は家具スケールの優先空間を寄付し、日常的に助けを必要とする要福祉者は大きく減築する。このように優先空間が街を侵食していくことで、お互いの存在を認め、誰でも居場所を見つめられる街になっていく。

## 三 政策化

募空間という概念が社会的に浸透していくと、より優先空間を利用しやすくなるために街の優先空間マップが作成され、利用者が増加していく。優先空間の場所を示すと共に、募空間の度合いによって色が分かるようになっている。要福祉者の募空間のアイコンを押すとどんな手助けを必要としているかがわかる。

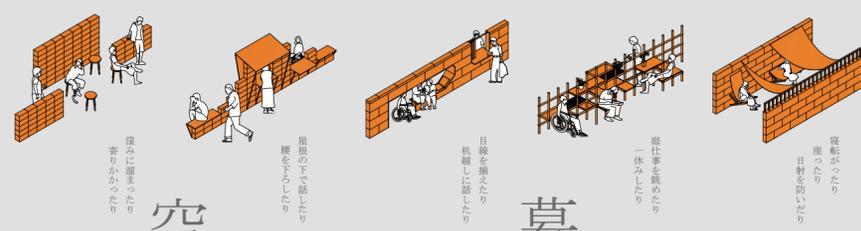


やがて募空間の為の住宅の増改築が行政による補助対象となっていく。生活が車いすに変わったり、介護が必要になったりした人が引き続き同じ住宅で快適に暮らすための改築のハードルを下げる。また空き家を含めた住宅の増改築をしたい健常者も増減築部の一定割合を優先空間にすることで補助対象となり、空き家が有効活用されると共に、優先空間が街のあらこちで見られるようになる。要福祉者のハンディキャップを優先空間が補うことで、互いに尊重し合うことのできる社会になっていく。

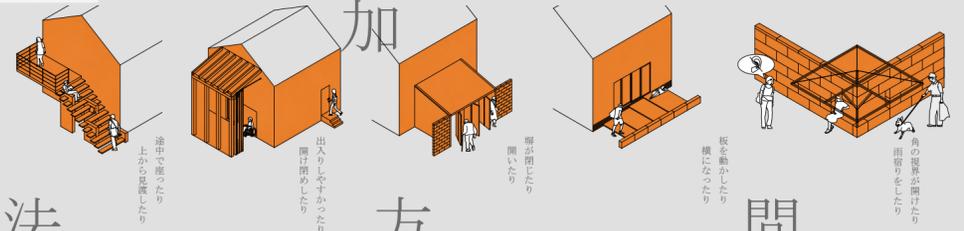
## 家具



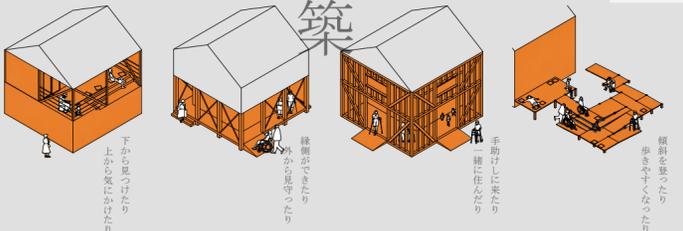
## 塀



## 付加



## 減築



## 法

## 方

## 間

## 空

## 募

